

L2022-1

2022 年度
市川中学校 第 1 回 入学試験問題

国 語

50分 100点満点

2022 年 1 月 20 日実施

【注意事項】

1. 試験開始のチャイムが鳴るまで、この中を開いて見ないこと。
2. 試験開始後、解答用紙に受験番号、氏名を記入すること。
3. 試験終了のチャイムが鳴ったらすぐに筆記用具を置き、解答用紙を裏返しの状態にすること。
4. チャイムが鳴っている間に記入した解答は、無効にすることがある。
5. 問題冊子は各自で持ち帰り、解答用紙は必ず提出すること。
6. 答えはすべて「解答らん」に書き入れること。
7. 解答の際には、句読点や記号は1字と数えること。
8. コンパス・定規は使用しないこと。

【一】次の文章は、あさのあつこ「みどり色の記憶」の全文である。これを読んで、後の問いに答えなさい。なお、出題に際して、本文には一部表記を変えたところがある。

街は夕暮れの光の中で、淡い金色に輝いていた。その光を浴びながらコンビニエンスストアの前を過ぎまっすぐに歩く。ふっといい匂いがした。焼きたてのパンの匂いだ。

「あら、千穂ちゃん、お久しぶり」

『ベーカリーYAMANO』のドアが開いて、白いエプロン姿の女の人が出てきた。丸い顔がにこにこ笑っている。優しい笑顔だ。同級生の山野真奈の母親だった。笑った目もとが真奈とよく似ている。小学生の時から真奈とは仲よしで、この店でよく焼きたてのパンやクッキーをこちそうになった。千穂は特に食パンが好きだった。窯から出されたばかりのほかほかの食パンは、バターもジャムも必要ないぐらいおいしいのだ。しかし、

「他人さまのおうちで、たびたびごちそうになるなんて、はしたないわよ。もう、やめなさい。欲しいなら買ってあげるから」母の美千恵にそう言われてから、『ベーカリーYAMANO』に寄るのをやめた。

美千恵はときどき、食パンやケーキを買ってきてくれる。有名な店の高価なケーキをおやつに出してくれたりもする。けれど、そんななおいしいとは思えない。どんな有名店のケーキより、真奈たちとくすくす笑ったり、おしゃべりしたりしながら、口いっぱいに頬張ったパンのほうがずっとおいしい。

もう一度、ほかほかの食パンにかじりつきたい。

そんなことを考えたせいだろうか、キュルキュルとおなかが音をたてる。頬がほてった。

やだ、恥ずかしい。

しかし、山野のおばさんは気がつかなかったようだ。千穂の提げている布製のバッグをちらりと見やり、尋ねてきた。

「これから、塾？」

「はい」と答えた。バッグの中には塾で使う問題集とノートが入っている。

「千穂ちゃん、偉いわねえ。真面目に勉強して。それに比べて、うちの真奈ったら、受験なんてまだまだ先のことだって涼しい顔してるのよ。塾にも通ってないし。ほんと、千穂ちゃんをちょっとでも見習って、しっかりしてほしいわ」

そんなこと、ありません。

1 千穂は胸の内で、かぶりを振った。

真奈は偉いと思います。しっかり、自分の将来を考えてます。あたしなんかより、ずっと……。

「千穂、これ、まだ誰にも言っていないんだけど……あたし、お父さんみたいになりたいなって思ってるんだ。パン職人」

今日のお昼、一緒にお弁当を食べていた時、真奈がぼそりとつぶやいた。昼食の前、四時限めに、来年にひかえた受験に向けて志望校をどう決定していくか、どう絞っていくか、担任の教師から説明を受けたばかりだった。

「……高校受験というのは、ただの試験じゃない。きみたちの将来につながる選択をするということなんだ。具体的な職業までは無理としても、自分は将来、何がしたいのか、あるいはどんな人間になりたいのか、そういうことをじっくり考えて進路を選択してもらいたい。自分の意志が必要なんだ。自分の将来を自分自身で選択するという意志をもってもらいたい」

いつもはのんびりした口調の担任が、生徒一人一人の顔を見やりながら、きっぱりと言いきった。

意志をもってもらいたい。

その一言を千穂が心の中で反芻していた時、「パン職人」という言葉が耳に届いたのだった。

「なんかさ、うちのお父さん、普通のおじさんなんだけど、パンを作ってる時だけは、どうしてだかっこよく見えるんだよね。作ったパンもおいしいしさ。お客さん、すごく嬉しそうな顔して買いに來てくれるんだよね。なんか、そういうの見てるといいかって、すごくいいなって。もちろん、大変なのもわかってる。朝なんてめちゃくちや早いしさ、うちみたいに全部

手作りだと、ほんと忙しいもの。嫌だなあって思ってた時もあったんだけど……実はね、千穂」

「うん」

「この前、お父さんと一緒にパン、作ってみたの」

「へえ、真奈が？」

「うん。もちろん、売り物じゃなくて自分のおやつ用なんだけど、すごく楽しくて……あたし、パン作るの好きなんだって、本気で思った。だからね、高校卒業したらパンの専門学校に行きたいなって……思ってたんだ」

少し照れているのか、頬を赤くして真奈がしゃべる。そこには確かな自分の意志があった。

真奈って、すごい。

心底から感心してしまう。すごいよ、真奈。

真奈が顔を覗き込んでくる。

「千穂は画家志望だよね。だったら、やっぱり芸術系の高校に行くの？」

「え……あ、それはわかんない」

「だって、千穂、昔から言ってたじゃない。絵描きさんになりたいって。あれ、本気だったでしょ？」

「……まあ、でも、それは……」

夢だから。口の中で呟き、目を伏せる。うつむいて、そっと唇を噛んだ。

山野のおばさんに頭を下げて、また、歩きます。さっきより少し足早になっていた。

花屋、喫茶店、スーパーマーケット、ファストフードの店、写真館……見慣れた街の風景が千穂の傍らを過ぎていく。

足が止まった。

A 香りがした。とてもいい香りだ。焼きたてのパンとはまた違った芳しい匂い。

立ち止まったまま視線を辺りに巡らせた。写真館と小さなレストランの間に細い道がのびている。アスファルトで固められていない土の道は緩やかな傾斜の上り坂になっていた。この坂の上には小さな公園がある。そして、そこには……

大きな樹。

枝を四方に伸ばし、緑の葉を茂らせた大きな樹がある。小学校の三、四年生まで真奈たちとよく公園に遊びに行った。みんな、大樹がお気に入り、競って登ったものだ。

あれは、今と同じ夏の初めだった。幹のまん中あたりまで登っていた千穂は足を踏み外し、枝から落ちたことがある。かなりの高さだったけれど奇跡的に無傷ですんだ。しかし、その後、大樹の周りには高い柵が作られ簡単に近づくことができなくなった。木登りができなくなると、公園はYにわかに退屈なつまらない場所となり、しだいに足が遠のいてしまった。中学生になってからは公園のことも、大樹のことも思い出すことなどほとんどなかった。

それなのに、今、よみがえる。

大きな樹。卵形の葉は、風が吹くとサワサワと優しい音を奏でる。息を吸い込むと、緑の香りが胸いっぱいになり満ちてくる。千穂は足の向きを変え、細い道を上る。どうしても、あの樹が見たくなったのだ。塾の時間が迫っていたけれど、我慢できなかった。ふいに鼻腔をくすぐった緑の香りが自分を誘っているように感じる。大樹が呼んでいるような気がする。

だけど、まだ、あるだろうか。とつくに切られちゃったかもしれない。切られてしまつて、何もないかもしれない。

心が揺れる。B ドキドキする。

「あっ！」

叫んでいた。大樹はあった。四方に枝を伸ばし、緑の葉を茂らせて立っていた。昔と同じだった。何も変わっていない。周りに設けられた囲いはぼろぼろになって、地面に倒れている。だけど、大樹はそのままだ。

千穂はカバンを放り出し、スニーカーを脱ぐと、太い幹に手をかけた。あちこちに小さな洞やコブがある。登るのは簡単だ

った。

まん中あたり、千穂の腕ぐらの太さの枝がにゅつと伸びている。足を滑らせた枝だろうか。よくわからない。枝に腰かけると、眼下に街が見渡せた。金色の風景だ。C 光で織った薄い布を街全部にふわりとかぶせたような金色の風景。そして、緑の香り。

そうだ、そうだ、こんな風景を眺めるたびに、胸がドキドキした。この香りを嗅ぐたびに幸せな気持ちになった。そして思ったのだ。

2 あたし、絵を描く人になりたい。

理屈じゃなかった。描きたいという気持ちが突き上げてきて、千穂の胸を強く叩いたのだ。そして今も思った。描きたいなあ。

今、見ている美しい風景をキャンバスに写し取りたい。

画家なんて大仰なものでなくていい。絵を描くことに関わる仕事がしたかった。芸術科のある高校に行きたい。けれど母の美千恵には言い出せなかった。母からは、開業医の父の跡を継ぐために、医系コースのある進学校を受験するように言われていた。祖父も曾祖父も医者だったから、一人娘の千穂が医者を目ざすのは当然だと考えているのだ。芸術科なんてとんでもない話だろう。

絵描きになりたい？ 千穂、あなた、何を考えてるの。絵を描くのなら趣味程度にしときなさい。夢みたいなこと言わないの。

そう、一笑に付されるにちがいない。大きく、深く、ため息をつく。

お母さんはあたしの気持ちなんかわからない。わかるうとしない。なんでもかんでも押しつけて……あたし、ロボットじゃないのに。

D ざわざわと葉が揺れた。

そうかな。

かすかな声が聞こえた。聞こえたような気がした。耳を澄ます。

そうかな、そうかな、本当にそうかな。

そうよ。お母さんは、あたしのことなんかこれっぽっちも考えてくれなくて、命令ばかりするの。

そうかな、そうかな、よく思い出してごらん。

緑の香りが強くなる。頭の中に記憶がきらめく。

千穂が枝から落ちたと聞いて美千恵は、血相をかえてとんできた。そして、泣きながら千穂を抱きしめたのだ。

「千穂、千穂、無事だったのね。よかった、よかった。生きていてよかった」

美千恵はぼろぼろと涙をこぼし、「よかったよかった」と何度も繰り返した。

「だいじな、だいじな私の千穂」そうも言った。母の胸に抱かれ、その温かさを感じながら、千穂も「ごめんなさい」を繰り返した。ごめんなさい、お母さん。ありがとう、お母さん。

思い出したかい？

うん、思い出した。

そうだった。この樹の下で、あたしはお母さんに抱きしめられたんだ。しっかりと抱きしめられた。

緑の香りを吸い込む。

これから家に帰り、ちゃんと話そう。あたしはどう生きたいのか、お母さんに伝えよう。ちゃんと伝えられる自信がなくて、ぶつかるのが怖くて、お母さんのせいにして逃げていた。そんなこと、もうやめよう。お母さんに、あたしの夢を聞いてもらうんだ。あたしの意志であたしの未来を決めるんだ。

大樹の幹をそつとなでる。

E ありがとう。思い出させてくれてありがとう。

樹はもう何も言わなかった。

風が吹き、緑の香りがひときわ、濃^こくなった。³千穂はもう一度、深くその香りを吸い込んでみた。

問1 ー線X・Yの本文中の意味として最も適当なものを後のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。

X 「反芻」

A いつも考えていること

I 繰り返し練習すること

ウ 何度も思い返すこと

E じっくり考えること

オ 急に思い出すこと

Y 「にわかに」

A 確実に

I 非常に

ウ いつも

E とても

オ 急に

問2

——線1「千穂は胸の内で、かぶりを振った」とあるが、このときの千穂の気持ちはどのようなものか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 千穂は、真奈がなろうとしているパン職人の方が、自分になりたいとずっと夢見ている職業よりも立派なものだと思っている。

イ 千穂は、パン職人になるとすでに自分の意志で決めている真奈の方が、将来を全く考えていない自分よりも偉いと思っている。

ウ 千穂は、親への反発^{はんぱつ}からパン職人になることを選択した真奈の方が、親の意見に合わせて夢をあきらめた自分よりも偉いと思っている。

エ 千穂は、パン職人になると自分で決めている真奈の方が、親に流されて自分で将来のことを決められていない自分よりも偉いと思っている。

オ 千穂は、パン職人になるという将来をはっきり想像できている真奈の方が、将来をはっきりと想像できていない自分よりも偉いと思っている。

問3

——線2「あたし、絵を描く人になりたい」とあるが、それはなぜか。70字以内で説明しなさい。

問4

——線3「千穂はもう一度、深くその香りを吸い込んでみた」とあるが、このときの千穂の気持ちはどのようなものか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の将来についてあまり考えず、母の思い描く理想に疑問を抱くこともなかったため、母と将来のことを話し合う必要もなかったが、自分のことをわかってもらえない母のことを思い返し、自分の将来について母の言いなりになるのはもうやめようと考えている。

イ 自分の将来の希望を母に説明する前から、母が自分の希望を理解してくれないと決めつけ、母の言ったとおりにしなければならぬのかと思っていたが、母が自分のことを大切に思ってくれていた思い出がよみがえり、自分で自分の将来を決めるために母としっかり話してみようと決心している。

ウ 自分の将来について今まで真剣に向き合わず、母の命令にしたがって、自分のやりたいことをせずに過ごしてきたが、自分のやりたいことをしっかりと説明すれば母はきつと味方になってくれると考え、自分の将来について相談してみようと思っている。

エ 自分の将来のことを考えてくれている母と話し合いをせず、自分の将来は自分で決めるものだと思っていて、今まで母へ将来の相談をすることはなかったが、母が自分のことを心配してくれたことを思い出し、母にも将来のことを相談する必要があると考え直している。

オ 自分自身で将来のことを決めず、母の言いなりになってしまっていたが、母が自分に嫌われないように優しくしてくれたことを思い出し、母が自分への接し方を今でもずっと悩んでいると気づき、母に自分の将来への思いを話してお互いの関係をよくしようと決意している。

問5

この文章全体から「美千恵」はどのような人物だと読み取れるか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 娘を自分の思いどおりにしたいと思っている反面、娘から嫌われないとも思っている。

イ 娘につらい思いをさせたくないと考え、娘の将来のことを自分ですべて決めていく。

ウ 娘のことを一番に思っているが、世間からどう思われているのかも気にしている。

エ 娘の意見を聞こうとせず、自分自身の理想を娘に押し付けてしまっている。

オ 娘に対して自分の考え方を押し付けてしまうものの、娘のことを大切に思っている。

問6 この文章の表現についての説明として適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア——線A「香り」とあるが、この物語は、千穂が「香り」をかぐことをきっかけに昔を思い出すことで、千穂の心情が変化した物語が大きく展開している。

イ——線B「ドキドキ」などの様子を表す言葉が使われることによって、物語の状況じょうきょうを読者に対してより想像しやすくしている。

ウ——線C「光で織った薄い布を街全部にふわりとかぶせたような金色の風景」では、比喩表現ひよひょうが用いられたことで、千穂が大樹の上から見た光り輝く夜景の美しさを、読者が想像しやすくなっている。

エ——線D「ざわざわと葉が揺れた」では、木の葉がゆれ音を立てている様子を、樹が千穂に話しかけているかのように見立てている。

オ——線E「ありがとう。思い出させてくれてありがとう」のように、千穂が声に出していないセリフは、「」を付
けずに表すことで、心の中の言葉と実際に声に出された言葉の違いをわかりやすくしている。

二 次の文章は、前崎信也『アートがわかると世の中が見えてくる』の一部である。これを読んで、後の問いに答えなさい。なお、出題に際して、本文には省略および一部表記を変えたところがある。

京都に住んでかれこれ十数年。仕事は文化関係なので、現在のこの街の文化の現状はとてよくわかっていふつもりです。「伝統文化はどうなっているか」と聞かれれば、「絶滅ぜつめつしかけている」と答えます。

その理由には色々いろいろとありますが、根源にあるのは日本・京都にはびこる「伝統文化は今あるままに継承けいしょうしていかなければならない」という考え方です。なぜそうなるかといえば、現在の日本文化・京都文化を牛耳ぎゅうじっている人々が「1「変わらない」とを選択せんたくして生き残ってきた人々だからです。芸術の世界にとってそれはとても危険なことです。

…〈中略〉…

変わろうとせずに同じことを繰り返すとうなるのでしょうか。ここでは日本の「やきもの」を題材にお話したいと思います。理由は私の元々もともとの専門が陶磁器とうじきの歴史だからです。さて、日本人が使う食器の多くは、土や石の粉を求める形にして、高温で焼き固めて作られます。陶磁器大国と言われるほどに、日本全国津々浦々つつつうらで、多種多様なやきものが生産されてきました。各地で生産された食器が都市に普及ふきゅうしはじめたのは江戸時代、全国の一般家庭いっぴんに普及していったのは明治時代のことです。

一般に広がり始めると、明治時代の終わりにくから「割れる」という陶磁器の欠点を改善しようという試みが始まります。お金持ちなら新品に買い替えれば済む話ですが、庶民しよみんがなけなしのお金を払はらって買った高級食器がすぐ割れるなんて耐えられないことです。現代に比べ、当時の陶磁器は衝撃しょうげきに弱いものでした。真冬に熱湯を注ぐと急激な温度変化で割れるというところもありました。より硬かたいやきものや急激な温度変化に強いやきものの開発がはじまったのはそんな理由からです。

日本の研究者は優秀ゆうしゅうなので、時間が経てば経つほどに陶磁器はどんどん硬くなり壊れなくなりました。やがて「春のパン祭り」でもらえるような、壊そうと思っても壊れない丈夫じょうぶすぎる皿が完成したのです。

2 お客様のためを思つて真面目に丈夫すぎる製品を造り続けると、新しい製品に買い替える人が少なくなります。買う人が減れば、売り上げが減るのは当然のことです。とはいえ、積極的にわざと壊れやすい製品を生産することは真面目な日本人には難しいことです。このままでは未来がないので、※ビジネスセンスのある人は3 まったく新しい製品を開発し、市場の開拓をはじめます。陶磁器の世界で食器以外の製品開発がはじまったのは明治時代の後半でした。新しく開発に着手された製品とは、バスタブ・シンク・トイレといった衛生陶器、入れ歯などです。

京セラという企業がありますが、「京都セラミック」を略して「京セラ」です。セラミックとは陶磁器のことです。携帯電話のような精密機器に入っている部品を製造販売しています。日本ガイシという会社が愛知県にあります（名古屋にある日本ガイシホールの名前を知っている人もいるでしょう）。発電所・変電所・鉄塔・電柱に使われるガイシ（磚子）の会社です。どちらも電気にかかわる企業ですが、電気のある所には、電気を通すための部品だけではなく、絶対に電気を通さないようにする部品が必要だからです。そこで登場するのが電気を通さない素材であり丈夫な磁器ということでした。

衛生陶器もそうです。TOTOやリクシルといった企業が生産する日本国中のシンクやトイレはすべてやきものです。TOTOは東洋陶器という会社名が由来です。その名前から想像できるように、かつては食器を扱う会社でした。衛生陶器は基本的に再利用されるものではないので、新しい建物が建つ時は必ず必要になります。近年では日本の優秀なトイレが海外でも人気だということを知る人も少なくないでしょう。さらに「セラミック・インレー」などと呼ばれる、硬くて白い人工の歯を口の中にお持ちの方も多くおられるはずです。これもやきものです。

こういった企業は、かつて食器を作っていた人々がはじめたものです。そこから、食器よりも儲かり、現代の人々の生活に即した産業となり、日本を代表する工業製品を生産する大企業に成長したのです。そういうふうに見れば、日本の陶磁器産業は江戸時代から脈々と続き、お金を生み出し続けているということになります。すごいことです。

しかし、今も昔と変わらずに食器を作っている人々や会社とはどうなっているかを見ると、事情は違います。デザインの変

化こそあれ、基本的には同じことを繰り返してこれまで生き残ってきました。同じ種類のものを、これだけの期間続けて来られたことは賞賛に値します。それができた理由は、（中略）明治時代以降、日本のやきものに与えられた「日本が誇る固有の文化」という役割があったからです。

芸術家として活躍した陶芸家は、戦後に国からその技術が「文化財」であると認められ、「人間国宝」や「芸術院会員」と呼ばれるようになりました。経済産業省は、一九七〇年代に徐々に数が減ってきた伝統的な工芸品を作る技術ある人々を認定し「伝統工芸士」という称号をあたえました。これらの称号を得た人々は日本文化を海外に発信する場面で、古き良き日本の象徴となりました。海外からの※ゲストが来日すれば、母国に持ち帰ってもらおうお土産を準備しました。その目的のために「同じことを繰り返し続けること」を約束させられたのです。※リターンとして彼らが得たものは何かといえば、「助成金」や「補助金」という名の延命薬です。

この仕組み、当初はうまくいったように見えました。しかし、4 バブル経済の崩壊後に限界を迎えます。経済が停滞すると、企業も個人も不要不急のものに対する支出をカット。お世話になった取引先への記念品として社名入りの工芸品を関係先に配るようなことは激減しました。年末にカレンダーをもらうことが最近減ったと思いませんか。ビジネスの世界でのお中元もお歳暮も昭和の伝統と呼んでもいいくらいになりました。

生活をするだけなら一〇〇円ショップで購入できる食器で十分。インターネットオークションで家にある不要なものが簡単に売れるので、現代の作家の食器よりも、過去の有名作家の作品のほうが安く手に入る。こうして、陶芸家の生命線としての「毎年大きな注文をくれるお客様」はあつという間にいなくなりました。

伝統工芸の世界が他の業態、たとえばカレンダーの印刷屋さんと違ったことは、新しい※マーケットを開拓するために、製品を大幅に変化させることを許されなかったことです。政府から「補助金」をもらうためには、文部科学省や経済産業省、地方自治体から「認定」された技術や製造方法を変えるわけにはいかないのです。何十年も前に認定された方法を続けること、

つまり「同じことを繰り返す」という意味での「伝統」を続けることを国や自治体が強制しているということです。さらにひどいことに、社会全体が、日本の伝統的な芸術や文化を守り続ける責任を、彼らに押し付けました。言い換えれば、自分たちは最新の生活を享受し、伝統工芸品を買うこともせず、彼らに時代遅れの芸術を保ち続けることを強要しているということです。

伝統工芸にかかわる人たちが「生活ができないので辞めます」というと必ず「やめるなんてもったいない」と嘆く人がいます。※SNSで「残念、何とかならないのか」とか発信しちやいます。では彼らが作家さんや職人さんが生きていけるだけの金額の作品や商品を買ってくれるのか、注文をしてくれるのかと言えば、答えは確実にNOです。そういうことを言う人ほど、反対するための無料の署名を集めたりサインしたりはするけれど、お金は出してくれないものです。

物を売って、その利益で生活する人々にとって、変化する社会で変わらずに生きていくのは難しいことです。室内を飾る置物や花瓶などを置く場所は失われていきました。高級食器は電子レンジに入れづらい。食洗器で洗いつらい。核家族化が進み、そもそも人を家に呼ぶこともないので、セットの高級食器など必要はない。変わり続ける世界に対応して、新しい製品を生むという※ポジティブな変化を起こさなければならないのに、国から目の前にぶらさげられた「補助金」をもらうためには、それをする 것도許されない。同時にこのルールが、彼ら自身が変化をしないために言いわけする理由にもなってきました。

そんな伝統工芸の世界にも、志のある若者が入ってこないわけではありません。しかし、そういう新人には、驚くほどに厳しい仕事環境が待ち構えています。師匠や上司は「自分もそうだったから」と、無報酬といっても過言ではないような低賃金を提示します。人手不足なので毎年恒例の地域イベントを若手に押し付けて無料で働かせます。そして、コンビニのアルバイトよりも安い賃金しかもらえないので、まともな生活ができません。未来が見えない状況に悩み、若者が辞めるとなると、お金を払う※甲斐性が自分たちにはないことは棚に上げて「最近の若い奴は根性がない」と彼らのせいになります。「テクノロジーは敵」で、新しい素材や技術を試すことは嫌。やる気のある若者が新しい方法を提案しても基本的には後ろ向き、インター

ネット販売したらデザインを盗まれると、過剰に反応して販売方法の見直しもしない。

芸術大学で最新の世界の芸術の動向や、先端技術や知識を学び、伝統産業の世界に飛び込んだ若者たちは、そんな状況に取り込まれて絶望します。特に芸術大学や美術大学では「自由に自分探しをして自分だけにしかできない作品を作ること」を学生に要求します。そんな教育をうけた若者たちが、補助金をもらい続けるために未来への可能性を自分たちで潰している大人たちが溢れる業界に入り、まともな精神を保てるでしょうか。意欲的に制作活動ができるでしょうか。

※ビジネスセンス：商売の才能。

※ゲスト：客。

※リターン：利益。

※マーケット：商品を売りこむ先。市場。

※SNS：インターネットを通して、文章・音声・映像などの情報を発信し、人々と交流することができるサービス。

※ポジティブ：積極的。

※甲斐性：経済力。

問 1 ——線 1『変わらない』ことを選択して生き残ってきた」とあるが、なぜそのようなことができたのか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 伝統文化の担い手は、日本の文化を守り続ける姿勢を保つことで、海外からの関心を集めることができたから。
- イ 伝統文化の担い手は、日本の伝統文化を守るべきだという強い意志により、作品制作を続けてこられたから。
- ウ 伝統文化の担い手は、日本の伝統工芸の技術を守った作品づくりをしていれば、補助金が得られたから。
- エ 伝統文化の担い手は、国から伝統工芸士などの地位を与えられることで、伝統技術の保存に専念できたから。
- オ 伝統文化の担い手は、日本の文化を守ることへの使命感を持つことで、補助金をもらうことができたから。

問 2 ——線 2「お客様のためを思つて真面目に丈夫すぎる製品を造り続ける」とあるが、それはどういうことか。本文中の「陶磁器」の例にしたがつて、70字以内で説明しなさい。

問 3 ——線 3「まったく新しい製品を開発し、市場の開拓をはじめます」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 明治以降における西洋の生活習慣の流入により、江戸時代から続いていて時代遅れとなった陶磁器産業から、時代に合った新しい産業へと転じたということ。
- イ 明治まで続いてきた陶磁器の性質や製造技術を応用して、新しい工業製品や生活様式の変化に対応した新製品を作り、従来よりも利益の出る産業を始めたということ。
- ウ 明治以降の科学技術の進歩により、それまでの製造技術が時代遅れとなった陶磁器産業をやめ、まったく新しい分野の産業で勝負するようになったということ。
- エ 陶磁器の新たな製造技術を利用し、明治以降の新しい生活に合わせて売れ始めていた新製品を生産することで、食器を作り続けている会社よりも利益を出したということ。
- オ 明治以降の新しい工業製品にも通用する、伝統的な陶磁器の製造技術を利用することで、食器よりも儲かる新しい産業にも進出したということ。

問 4 — 線 4 「バブル経済の崩壊後に限界を迎えます」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 経済の停滞により、伝統工芸品を大量に買う客が減少し、職人の収入が減ったが、国や自治体も厳しい財政事情の中で伝統工芸に対して補助金を出し続けることが難しくなっていたため、職人が生活していけるだけの金額を出せなくなったから。

イ 経済の停滞により、不要不急である伝統工芸品を買う客が減少し、職人の収入が減ったことで、補助金の重要性がこれまで以上に高まり、職人が国や自治体に認定された製造方法を守るようになったが、その結果新しいものが生まれず伝統産業の活力が失われたから。

ウ 経済の停滞により、高価な伝統工芸品を買う客が減少し、職人の収入が減ったが、これまで通りの製造方法を守ることで補助金をもらってきた職人は努力をしなくなっていたため、時代の変化に対応した新しい製品を生み出せなかったから。

エ 経済の停滞により、必要とはいえない伝統工芸品を買う客が減少し、職人の収入が減ったことで、伝統工芸を守りたい人々は補助金の増額を署名運動で要求したが、国や自治体も売れない伝統工芸品に対し補助金を出し続けるだけの余力がなくなってきたから。

オ 経済の停滞により、なくても困らない伝統工芸品を買う客が減少し、職人の収入が減ったが、伝統工芸として補助金を得るためには技術や製造方法を変えることができないため、職人は売れるような新しい製品を作ることでもできなかったから。

問 5 — 線 5 「未来への可能性を自分たちで潰している大人たち」とあるが、ここでの「大人たち」はどのようなことをしているのか。50字以内で説明しなさい。

【三】 次のア、オは、【一】のあさのあつこ「みどり色の記憶」の文章と、【二】の前崎信也「アートがわかると世の中が見えてくる」の文章を読んだ生徒たちの会話である。二つの文章を読んだ上での発言として適当でないものをア、オの中からすべて選び、記号で答えなさい。

ア 生徒A

『アートがわかると世の中が見えてくる』を読んで、伝統工芸の世界が抱える問題点を知ることができたよ。ぼくも芸術の世界に進もうと考えているんだけど、「みどり色の記憶」の千穂のように、親と将来について話してぶつかるのがこわいと思い、これまで進路についてきちんと話したことがなかったんだよね。でも、やっぱり勇気をもって親に自分の考えを伝えることが大事だって気づいたよ。

イ 生徒B

『アートがわかると世の中が見えてくる』を読むと、伝統工芸の世界で生きていくことの難しさがよくわかるので、「みどり色の記憶」の中で、美術の世界で生計を立てるのは難しいという千穂の母の発言には、一理あると納得するよ。わたしも美術の世界には興味があるけれど、その道に進む決心はつかないかな。

ウ 生徒C

『アートがわかると世の中が見えてくる』では、伝統工芸の世界は時代に対応できておらず、若者が低賃金で働いている状況だと書かれているね。「みどり色の記憶」の中で、千穂が芸術科に入りたいと母に言えなかったのは、そんな気持ちなどわかってもらえないと思っていたからだけれど、芸術を志す者が実際にその道に進み、特に伝統工芸の世界で生活していくとしたら、やはり大変なのかな。

エ 生徒D

『アートがわかると世の中が見えてくる』で言われているように、お客さんは伝統工芸が新しい試みを始めることを求めているけれど、「みどり色の記憶」の中で真奈が話した、パン職人のお父さんの働きぶりとお客さんの嬉しそうな顔との関係を思い起こすと、伝統工芸も、これまで拒否してきた科学技術を用いるという取り組みをすることで、お客さんがまた戻ってきてくれるのではないかな。真奈のお父さんの職人技が真奈に引き継がれるように、これからの伝統工芸の世界で大きな役割を果たすのは、若い芸術家なんだと思うね。

オ 生徒E

『アートがわかると世の中が見えてくる』では、伝統工芸の存続を願いながらも自分たちは工芸品を買おうとしない人たちについても述べられているね。芸術の世界が持続していくためには、多くの人々が美術品を買うことによって、芸術家の生活を支えることも重要なのだろうね。「みどり色の記憶」の中で、千穂は「絵を描くことに関わる仕事」がしたいと思っているけれど、「画家」とは呼ばれない、そのような仕事であっても、芸術に理解のある多くの人々の支えが必要であることに変わりはないと思うよ。

四

次の各文の――線のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1 国語の授業でヤクシを音読した。
- 2 ピアノにジユクタツするまで長い時間がかかった。
- 3 県内を自転車でジュウダンする。
- 4 ここにはかつてケイベン鉄道の路線があつた。
- 5 白砂セイショウの美しい海岸。
- 6 ハンでおしたようなつまらない生活。
- 7 タンポポがムラがって生えている。
- 8 農業をイトナむ。

問題は、これで終わりです。

*		*		*				*					
		*		*		*		*		*			
四		三		二				一					
6	1	問	問 5	問 4	問 3	問 2	問 1	問 6	問 5	問 4	問 3	問 2	問 1
													X
7	2												Y
8	3												
	4												
	5												

受験番号 ()
氏名 ()

「解答らん」

*のらんには何も記入しないこと。

*

国語
L1